定信紀行

第九話 南湖開鑿碑のこと

寄稿 市文化財保護審議会委員 佐川 庄司

南湖の完成から3年後の文化元年（1804）に建立された「南湖開鑿碑」には松平定信による造営の経緯を白河藩儒者広瀬典が次のように記している。「南湖は長い間手入れしないため、汚れたりふさがったりして山水の好きな人達も顧みなかった。定信公はこれを見て云われた。堤が壊れて水が漏ったのである。底を浚って深くし、堤を強化すればもとに戻って田に水を供給し、民を豊かにし、また皆で舟を浮かべて太平の世を楽しめるだろうと。（中略）遊びに来る人は絶えず、美しい眺めを見て喜んだ。樹木は年を加えてますます麗しい。数十年を経たらどんなだろう。」（大意、碑文は漢文）

碑文中の壊れた堤とは「千世の堤」のことである。この堤は「大沼土手」として慶安・寛文年中（1649～62）の白河藩主本多忠義の時代に造られていたが、その後徐々に荒廃し、周辺は湿地帯となっていた。そこで定信は、この堤に松を列植し、堤を強固にし、大沼の浚渫と周辺に桜・楓などの植栽を指示したという。元々の自然地形を生かしながら、関山や那須連峰などを借景に取り入れ、大名庭園の手法により17の名所を設けた。南湖の整備によって土地利用が可能となった地には藩校立教館の運営資金を得るため学田新田（合戦坂・池下・鬼越・石阿弥陀・小丸山など）が開発され、新たな集落（鬼越＝松風の里、池下＝八聲の村）も17景に取り込まれた。湖は異国船の警護に備え藩士の操舟訓練、庶民の舟遊びなどにも利用されたという。

問 観光課 ☎(28)5526

◀「南湖開鑿碑」（南湖地内 偕楽園東隣に所在）

白河かるた 札でつながる今・昔

九枚目「白川城」

もののふの
思いを継ぎし
白川城
も

白川城は、搦目地区の阿武隈川の南側に広がる、標高約400mの丘陵地を利用して築かれた山城であり、別称「搦目城」とも呼ばれます。

城の規模は、中心となる郭と推定される御本城山からいくつかの丘陵までまたがっており、広さは東西1・2㎞、南北約500～600mにわたり、白河地方で最大規模を有することが調査から判明しています。

鎌倉時代、下総国結城の武士結城朝光は、源頼朝の奥州藤原氏攻めに従軍し、その恩賞として白河荘を与えられました。その後、領地を分けられて白河に住み、成立したのが「白河結城氏」で、白川城を本拠として、周辺に勢力を拡大しました。

長らく白河結城氏の本拠であった白川城ですが、1510年に起きた、一族の小峰氏による、白河結城氏当主の結城政朝を追放した事件（永正の変）を経て小峰氏に権力が移ると、本拠としての機能は小峰氏の拠点の小峰城に移ったと推定されています。

白河結城氏の衰退に伴い荒廃した白川城ですが、廃城となった正確な年代は今も分かっていません。

結城一族の栄華とともにあったこの城跡は、今は静寂に包まれ、当時の興隆を偲ばせています。

問 まちづくり推進課 ☎(28)5533